

園と保護者が語り合う風土づくり

2012年4月

理事長

かたやまよしのり
片山喜章

子どもの何気ない振る舞いにもすべて意味があるのですが、私たち大人の多くはさほど深くその意味を探ろうとはせずにやりすごしたり、社会規範にそった価値観で“注意”したりすることがあります。保育者は基本的に子どもが本来持っている力を引き出すこと、うわべの賢さではなく本物の力を体得してもらいたい、この点に集中して、あれこれと具体的な方法を探り続けていると思います。しかし、保育者自身が学校教育制度の中で、あるいは幼少期の家庭の中で、つまり社会の中で自分の振る舞いの意味を必ずしも理解してもらってきたとは限らず、子どもの側に沿った保育を展開することは頭でわかっている、咄嗟の場面でそうそう表現できないことも現実としてあると思います。

ただここ数年、子どもに対する見方や保育のあり方について、保育界全体が新たな認識を持つようになりました（実態はまだまだ旧態依然としたままですが）。端的に言えば、これまでどちらかといえば熱血先生のような担任が居て、その下で子どもたちはより良く育つイメージが社会全体にありました。しかし、ここにきて、子どもは子どものなかで様々な刺激を受けて葛藤や戸惑いを経験しながら、自己を形成していくことという捉え方をするようになりました。それを後方支援するのが家庭です。保育園は子どもどうしが学び合えるような環境や場面を設定したり、協同性を要するテーマ活動を提供しています。私見としては、子ども集団の遊びのなかに大人が混じりこんで遊びを深め、遊びの楽しさを共有することで大人や社会への信頼を感得すると見通しています。親や保育者＝大人の遊び心が重要であるとする考え方です。このような日常が多いほど社会貢献欲や自己実現力、その子の胸の内側から自然にあふれる自己抑制力の醸成につながると期待しています。

真にがんばらないといけないのは、聡明でなければならないのは、大人（社会）です。

私たちは少しずつですが、子ども理解を深め、保育のコツのようなものを会得してきたように思いますが、社会全体を見ると「みんなちがっていい」「世界に1つだけの花」と共感されながら歌われつつも「子どもみんな、こう在らねば！」と無自覚に昔ながらの価値観を“願い”として押しついたり、必要な援助を「わがまま」として拒んだり、出来る能力を持っているのに安心＆安全の名の下にチャレンジさせず過干渉になる状況があちこちで見られます。このような大きなテーマに向き合うことは大事ですが、それ以前に保育園と保護者が子どもについて、あるいは育児について、また保育内容や園運営について語り合う文化を醸成していくことが一層大事であると思います。うわべでないほんとうの思いを語り合うこと豊かな保育が保障されると信じます。子どもはケンカの数だけ仲よしになることを私たち大人も謙虚に見習いたい、そんな思いを抱く年度初めです。